狂舞妓雜談

全

チ 13
261

261

百戲園芝翫著
獨醉舍國直畫

歌舞妓雜談

東都書肆 僊鶴堂 雙鶴堂 仝梓

中村芝翫口上

扨たゞ私儀ハ當二月中中村座のぶゝのゝ
おさ作て口上紙もつて申上仕る
ゑり 吉様方のもつてたのゝかども
かつてまこと半せんぶ忘るのぶゝ月しい
ぶゝ高地にもつてしく後居仕る
ゆゝ扨なり紅状合ゝり仕て
文ハ筆ゝ仕て葉ゝさ
ぶゝ絵ゝ仕るぶゝいゝ
ぶゝゝ仕る難みゝさ仕合ゝぶゝど
なゝり仕る昔より色ゝ多ゝさ
その中ゆてゝつゝゝるゝさゝ
ゝく役者のゝぶゝゝのり仕るゝまゝゝ

獨醉舍國直畫

彩紅の
鶴
おもゝの
彩紅
梅の木
蕊長ゝ
あゝ
かゝ

小說堂

はなのみやこはよし原の江戸のいづれも様の御ひいきにて
出板と云ふ魂までうつし仕てありがたき仕合にぞんじ奉り仕る
うけてやよし仕るへば小冊の絵にむり仕ることはいたし
若年のころより歌舞妓道の名誉の人々
在所へおる仕る事ども作者にもおそまつ仕る
と出板うけあつり仕るごとくまして又古の裏よ
うきなくし仕ては若きものどもに中しき世仕る出板
つまずきのとどのえ仕るる双鶴堂の主人因果や
くるしはげ繁で不量にて二三日かかって書へと
中仕る出板イヤイヤこれは素人がたの御らうじさ
とてはすぐさまにもなるまいなどふとどめ仕
されどぜひともやすとあらがかして仕るかし仕
ままぞ早速かきうつしまして出板おこが

ましき外題を付けて持参いたし仕る出板私も
後悔いたし仕るれどもはや桜木にまかり仕るさ
ふ事なればいたしかたなし右の訳つぶさに
申上仕る出板にむり仕る原来役者の絵にむり仕
まんば間紙つかり仕るよりわれは筆とる事はせんど
まかせでうきざまの描きはいらん由しのおどろ紙
これ仕るがひ上ありまする先は右の趣かいつまみ仕
てあらあら申上まいり仕る

寅三月

百戯園
芝甗述

京都四條北側
大芝居三階之圖

おぼろ月
ちゃ屋の
そうの
玉圃老人

坂東重太郎

国直画

中村松江

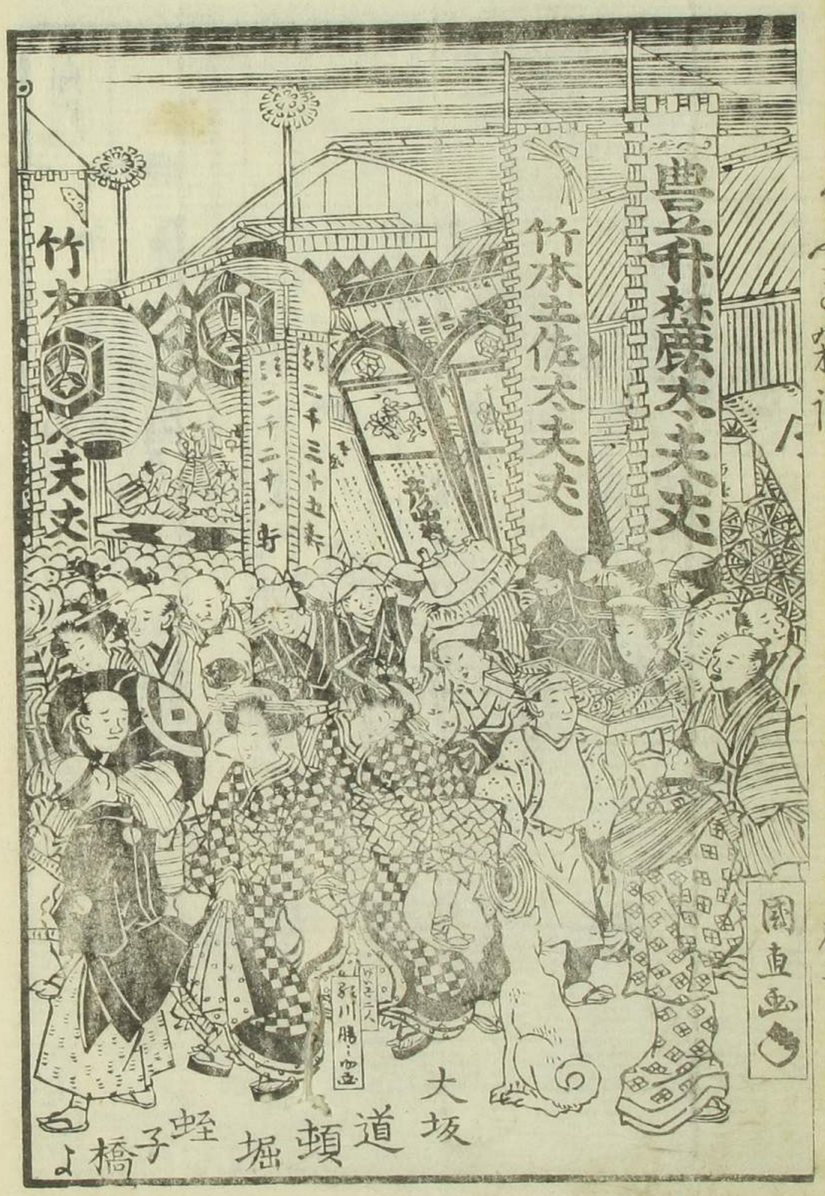
尾三五郎

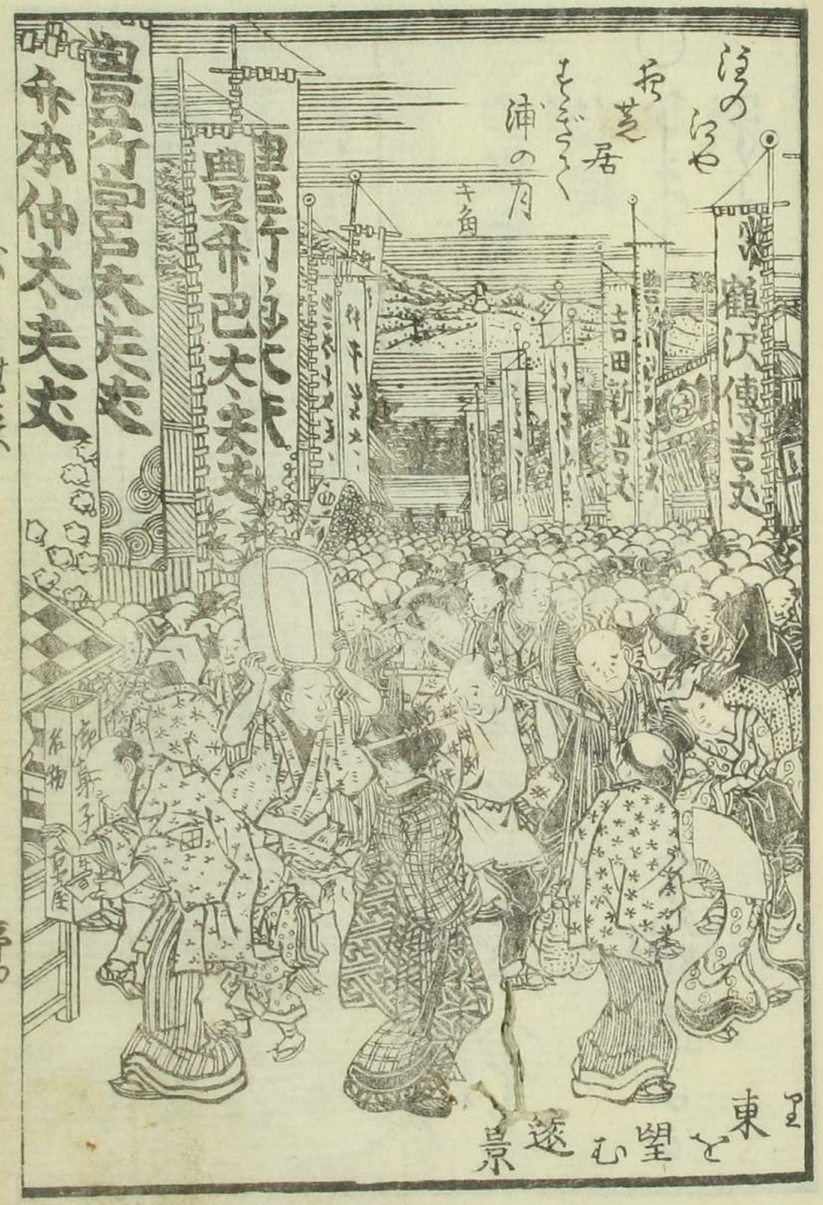
懐物

伝者

酒井

ヒイキ


豊千梦大夫丈
竹本土佐大夫丈
竹本
夫丈
二千三十八歩
二千三百五十五歩
紅川陽一四西
国直画
大坂道頓堀蛭子橋よ


浦の
春
芝居
ちぶさく
浦の月
キ角
鶴沢傳吉丈
吉田新五郎
豊千梦大夫丈
豊千巳大夫丈
豊竹冨士大夫丈
千本仲大夫丈
紅梅
東を望む遠景

凡例

○此書のおほむね実事をのべることなれども文辞をかざらざる故人のたゝ〳〵其まゝふるさびなり

○原本の上方の流中京〳〵とゝくども今大江戸の後者のゝ紙あゞく敢て依怙あらず後編を待ゝ〳〵

○本文よかゝるゝ新ふ号をまうらるゝ国直ゝ

李園叢書歌舞妓雑談

市川柏莚四代目団十郎曰役者い大荘るゞ才一ありいきぐ
出世をかゝえて形かゝち悪ゝるとべ下るの手ふ下を
とゝ中ゆゆ徐構ゆる姿ふて歩ゆバ下をゆそも
どこゆゝぶゝ地方い舞葬ゆうあゝきゆのゆれバ
隨分人ふゝゝ毛ぬゆうふ色がけて舞葬ふて日む
中のくよゝとべゝとかゝ役者い人風ゆい昔もゆく
ゝ古ども色ひゆる家業ゆれバ宿くかゝとてい

分多相應する樂としてあまり他へおぬぎは形へ
出さべそ稀ともうけごと後もたくさたとへば役者ハ
人間のうんせりのなれべるるこけい分寿羅よする
ぐは蔓も絡の既帽を放さぐと駕るホ乗ても留
場の者が連て分をたく切ホ拭ハ者ゆてるく
沙見拭が能とる為ゆて法締根附ゆどホ
蒲團が法けて並べそもぐけよ〆くうんえふ
屋狸なれば右更元金豆方への本公より
沢村納子二代目家十良曰豆拭ホるくべ並濱ゆてるホ

下ぶたるど提てあるくぐうく公易くうんゆ豆ベ人が
ようあ〆を右くせるるり常の元類ハ目ぐぬ拭
家異一通あまべ海るるり衣裳ハるるけ元
くたりのるり右くしあまり赤とくハ芸者汐魚
ふるゆもあり出者よるりてハ金拭の名をとる
ぐよくく役者ゆるりてハ上元の名代弱くうた
ものるり考くうの公ぐけゆて不弱元よりハ
衣裳と元て金代拭ゆるりハ藝代ゆぐよく
坂東新水元禄三年曰私どものの分代ぐくくるゆハ

金よりハ出ぬ夜叉が出へくるまぶとるのうち役者
の外上の能さりしるさり
山下金作曰たゝき夜叉を忘れまぶ仲間の者ども
笑そしもどもさぶて役者ハ古代衣裳と沢山
ふたり雪てきられぬものるり
潮川醫考二代目菊之丞曰舞扇ハ正絹の新ハ要と水
よ法けて拭つがめしるめりがあまぶ要がぬるぶと
正絹の半ゆて扇をとりうえるるどハ芸ゑぐ
るしたりのさり又招足をとるゆハ膝ヘカ残

入きて踏生せぶ足さるたが種くなりてけるぬる
めのさり見へ袋ハ白さ革見袋がよしさり
見くさるふ舞基板ふそげるどありても見ぐ
いさまぶと
又曰人のつく枝のよハ乳より下ゆて切るがよし
愛絶畜生の枝のよハ乳よりよゆて長く切るが
よし見藤田妻の正絹などふへるるのさり
又曰女の虚よ惚きて抱付とるるハ男のあるの
上よりだきついて彫代様へそむけるがよし

まくさまの家よりあきこうとの
方のよくさく迎でごさけべかのあるふんあるこ
市川海老蔵曰ゐ我のみ弟の役よ得あり対面
のこゝろ祐経ふ花かくらんとする時宗の公い祐
経紙親の敵と名ゐあらせ言葉ふて製紙
して其意ふて討乳よあらぶと敵討ハ牙揚き
幸呂紙とげるゐ弟ゐ徳員せんとハ出て
こで祐経ゐるでうゆて狩見の柄よ多とうけぬ
りのうり又草摺引ハ朝比奈ふとみ弟ゐ力競

ゆて引合ハ史弟摺を引切りかどのかうり朝
比奈ハせうごと静ふらくとらんゆてこうゐる
りかづくゆてとうるゆあるごとくべて角
お数の荒事ハ娘の酒ふ酔ふ乳持ゆて
さる事なり
沢村宗十郎曰曽我の十郎の役よ得あり祐
成ハ柔和ゝして堪忍ゐ弟一ゐり敵討まで力
の柄よ多ハかけねゐゆて涙人の多の上史仏の
事も縁倉の大名ゆハ揚巻ね乳持ゆて生粋

小生遅しでく誤てうろ〳〵えるゞよし〳〵で
敵よ向ひしとの性根をすえて随分強く
さゝぐべきなり
又曰侍の役わて後をたのみと思ふゞよし
町人いちらとうろと起ゞよし武士は論など
のときかよをとかけぬゞ強〳〵えるなり噪
喧のせろ招ざしをひ称くりまろきらうろし
そんなうろとりくせりふの町人の形なるさとゞ
なり

○生辞は愚をゑてそのの紙いのゞよし〳〵まあ
と気遣ひはうまとども雑と言ちゞひこうり
うひるものなりけんがい育人のゑ聞て耳を目
ふとる気持なまび聲とうろるなり又座敷
紛よ絶て〳〵て立居よ猫の剛うねせうふまる
ゞよし〳〵行月ゞ細月ふあいて時ぐたゝ右とり
う人猫び月紙燭の事あり
○吃はさし〳〵をせそ。かさくけこ。什文字だり
どりるなりあいうゑおを。えひふへほ。らまる

れろ。まみむめも。たちつてと。はらなれどめる
べからずと外をとめれバせりふ聞へかねるなり
役者をするにもまづ膝ハ揃て指先をそりて
せりふをのひ生きとがよし又跛ハ腰をかゞめ
てあるくハ虚らしく見ゆるなり片足を踏のべ
して延しうる方へ力をいれてうごくハちからなく
あるけバ本の跛よ見ゆるなり人間にハちんだ
をかくさんがよろし
○侍の老人ハ膝のをれぬやうにせねバ武士の
老人にて品よくみゆるなり町人の親父ハ腰
をまげてあるけバ町人の年寄なり又ふるものも
にハ片足にて立ちあし爪立てくふるへバ
自由よふるへるなり
○畜生の変化ハ足ハ爪立て歩くがよし
さりながら姿のゐるき人ハつまづちてあるけ
バ鈍に見ゆる也人踵にてあるくがよし爪立
もおなじ道理なり
栢莚曰般若ハ泣心にてするがよし幽霊ハ

二代目
訥子
狂言作者
津打治兵衛

市川
四代目
柏延
二代目
路考

気あいの弱き人は血のちゐてするがよゝしさゝ
よくさるのゝ亡魂なり
又曰顔色の青醒るゐゝ唇は白彩をつけまゝ
まゝゝえゆるなり藍の色ゝ血流ゐてさゝ
ゝゝうさゝゝ口ゝさゝゝるわゝ色ゝまゝゝえゆる
りのなり
○白眼まゝゝふ目ゝ移むりてにらめゝるさり
ゝ別ゝてよゝ
松鴻義平次曰る廉ゝ下まゝをさげて気きゝ

陰の房よゝえゆるりのなり脊の高き人ゝ豎膝が
よゝゝさいのひゝゝさ者ゝ横ゝ曲がよゝゝさけて死
ふゝえゆるなり
大谷廣次元祖十町曰役者ゝふゝ顔ゝ髭を剃るゝ年
寄ゝよゝゝて悪ゝゝたでなる気類ゝ結構ちる
捉あるゝゝ抜てゝゝゝ経験ゝよゝゝゆるゝよゝ
さゝゝゝゝて血ゝきゝりゝゝべゝゝゝゝと腐敗性来
の命乃家業なれゝ何のよゝゝゝゝ幸さゝ
ゝゝゝて生るゝゝたなゝゝゝゝゝまゝゝふ育ゝゝ気ゝ年

の遊民ゆて智恵ゞゝとゝもあゝくまと
る藥ゆてもあゝぬゝのうり絶て通路を
ゝゝ元金を分ゆて絶ゞ費のゞ費のと倹
約をとる事ゝゝ費の窮鑿ゝとゞまゞ
生一復者ゞ法ひくゝう
又曰藝ハ日向ゆて結ゝゝ日陰ゆく
とゝるゝゝ藝ハ悪ゝさゝりゝゝ私ゞもハ日向
へ出て藝ゝする事ハ出ゝ事中ゝゝ狩ゝの社内
ハ幕毎ゝ一日出ても冥ゝゝ復とゝゝハ煙草

一ぷく、吾わゞの同ゝほめゝゝゝ判を
ゝる事もあゝ役の実ゝゝあまり出ゝゝぬ
ものゆて出ゝれるも別めゝあるもゝゝのうち
ふて能ゝ事ゝゝても真ゝゝるゞゝ皆ゆゝ
ゝゞゝり
中村少長二代目七ゝ月日葬ゝ蓋ゝ出ゝ居ゝる役ハ悪ゝ
きゝものゝりゝゝわゞの孫味佳者ゆても
服一杯のゝゝゝゝゝゝて鼻ゝつて嗅ゞゞ
元祖中村仲ゝ名市ゝ市方係へ居ゝ時能ゝ

歌舞妓の藝の仕方いろわざ遠くへぞ傳
たづひあり乃まこべ車道と外料の口癖治
わどかりうやしひとの言葉にて口こそされ
どみこがまし〳〵乃まどく能役者い車道ゆて歌
舞妓役者い外料ゆれそよ上うゆえてあ〳〵紅
面ゆ雲とがよ〳〵とく〳〵歌舞妓の藝い小柄
同ゆ雲の彫物乃ごく〳〵よ後うゆえてもうさ
ゆうゆいこ〳〵うゆ車乃うり
栢莚曰ある役者牡云の仕うちうく笠ら乃てる

而紅ゆ雲ひうゆ〳〵ゆ中せども見い鞦の乃乃
内のごく〳〵ゆ紅個のくあり乃くゆうう
うこ個のくあり乃内のこくい皆くぐ生
き得うる而るれたひぐきゆあても吉のうく生る
而紅わめらまるこうり
又曰荒車い上下を着ても素見ぐ後〳〵乃
るうり車ゆて歌乳の叶うい色見雲代用
ひうりまこ下ぐい後黄ぐう向きい弱く
うえてゆ〳〵荒車い七ゐ八ゐの子供のま孫を

さるゑのうり侠者のまゆの下司なるなり
○真赤ゝ舞茸の西瓜もけば弱くえ
あるのうりさぢうのよ向ひて三角よりとられバ
強く大まふえゆるりのうりとゝ荒末
い見をるげ生さぢうゝ又たゝさの淺茨と
紫のるのいまぜうえハでのそごさがゝ脊乃
ひくゝき者ハ少切をもく結てよゝ引上
るゞ自ぢらくふしてるあくよ強くえ由る
るり素袍上下のうさゆも下弱ゝうくぢよ

むりげうよ結あり皐袍をゆるくゝて庭下弱
の裏よちいさゝ蒲團をつけるるり結素袍乃
時そむけてもふゑふ猶當ぢよゝひよるゝ者
ふてもゑ強くえあるなり猶當のよゝ末紐
の繻絆をゑるぢよゝ暑のゝもゝ荒末ハ
ゑ甲服引ぢよゝ草ハ悪ゝゝ水綿よ白絹
の裏を付るる裕ゑどぢよゝゆうゝの下ゝゝ縅無袴
ろ又ハ紅ろ裃金の中形ぢうゝ
○眼の角乃丸き隈どりハりと三角よりさせ

国直画

なり云ん陣方へ行きし時古代の名仮の面
あまくさ抜見いさ出るてい如大菱とらく
西の眼乃ふち筋ゆきて二さとぢあり球の形
ほくくえしゆえ御日樂屋ゆて眼のふちの
隈どり紙ゆりていふ〳〵まべうくまて悪しく
えにくきゆへ早くく中のゆきと歩よたくい
くさう新のくまどりと面の彩色い同じやうよ
ちるれども拾外のふちの也とれい私サ一案のふた
ゆて今の隈どりの始なり

姉川新四郎日小ぐらの着乃丈を仕組ゆい陸奥
敵役小員る也うよたちまるりを仕組ぶよし
さんぐよまけてりえやいよく員と拭りゆ
ゆ紙乱紙久て揚いるけて強くえるるの
なり
二代目路考日女形ゆい女中元よ女房などよ
うのうんとちきふあい余り好まぬ事なり
男よ美くひあさきて あの也うな女ぶあ
らぶと思れる也うよ考ふきりの也常ぐりち

ゆるゐの肩うの櫛うりの年のろい寝巻帯な
どの初物も女中ぐるの気よへるゆう嘗風俗絵
ゐがけて浮屋敷方又女郎流婚ゑ絵よりいろる
まで皆ま孫をされる中ゐゆと頼の中肝要なり
女中方の裏屋をうけたハやそう同じ女ゑとお
とろ色るゞ丈一の女中色のわきなり
又曰女形ゑ眉毛の濃者ハ墨ゆて仕ゑうぬゞ
ゑ仕ていとうくえゆるこまと風俗のあ〜さ
人ハ後よちいさい蒲団をハ布ゆて巻て帯を

志ゐきべ深ゑ巻るりのゑり男女よひぎ〜ゑと
ゑ紙紙焼てたく見人毎家寝ゑと紙落く
ときて新よぬき毛ぐ手ぐよりても鍋のよ
らぬものゑり
㊀家老の女房ゑどの役ハ勤て不器量な
る気持ゆて するゞゑ見忠臣蔵のお石の
類なり又女の役乃えうと紙ハ甘りふより
家よまづ活りのゑり白手ハゑうぼよゞ〜く
りてゞゑ

訥子曰傾城賞の狂言に拵竹打ちのせんく彩
色うつくしげなる女郎ようくをぬしてあく
ものうつ可き者紙つくるゆへ用紙ばかあ
りくえのるこ悪き者ハ寡紙にてえゆるこ
古人市川宗三郎曰敵役ハ隨分叮嚀よきとふ
わるくうつて悪くてしおしこうあるさぶよ
山中平九郎曰敵役ハ世ふのおさぶは不可
猶ふてるだくこを思安案してみるこのより
栢莚曰ある年の狂言ハ山中平九郎熊坂乃

役ゆて常盤ハ義経教してかくてみるゆへ私
武者振彩ゆて生捕物ゆ遠物語ゆ
みてきるを右の方ゆ吸物ゆうとすれば
まじたゆ出せば右ハ旦ゆて高地ゆくゆ
ゆへをとりけてむりよ吸物舞茶をもひさて
楽屋ゆへて正九郎をきゆ付んとゆふゆ
平九郎ぬゆ彩ゆてゆ東の方の横
姿よゆ女中ゆゆるゆへきるゆて
ものゆとゆ平九郎ハをゆよりいぢゆる

男なれども義に依りて上てまこゆ長二代目初め
の時一万の子後ゆて平乃弟に金石の後ゆく
初めて通狂言の仕組なり我に似ぶるじや
と問よ如此さんゆとい〳〵せりふと稽古の時
さうでいなのいと三十遍ぞりいひ出さるゆ
おももろみ山よ後ゆて洞紙とぶ(ぶ)ぐらさんは
といひたまびそれでこそよの川津を付る親
のうえなまび恨めいとらゆ山ゆてすれびをのづ
うるうぐが出るといひるとたり

○

英子狂言作者津打治兵衛曰古人よ三ツの幕あり行燈幕なり
殿より上使をうけ刀をさげて乗乃(のり)ふとして
張合ぐうの下坐の亀たのこ絵と白雛ゆふな
ま掛をかりて行てまいりませうトちよんくと
幕こま一ツ○山下京右の元祖狂言師中村歌右衛門
百姓ゆて家老の死骸をあづりてこゆりな
ぐらゆ中のこうるみて女房よ早う行てこいと
向よへ中りたる紙をうちるぐらよく見ゆ紙
こづめ忠義の為よ死んぐらさうじやと誓を切

人形芝居
樂屋
稽古
乃圖
作者

三弦
太夫
頭取

さてこの今は世ふさまざまいろ〳〵暗らん紅梅の糸
ふ揮さして彼岸よりてん南無阿弥陀仏く
ちうんくと幕静ふるたるくたへふこと二り
○三ちう姫の身智紙たてんといろく思案を
さること紙女房安くるる女猿楽堂を指あち
こちあるさまるり考へなぐらきせるの屋敷
とにはけ中けどしてあるきおもられする見ゆて
見ぶ一度よどろと笑へさうやうましくてん
思案ぶでさうぬトこの中しまく見三りなり

こと紙古人の三幕とりの見をとるふ役者
古今ゆちう〳〵
評ふ曰世ちう人ちけ三條可解又解をべうう
ぐ世ふ流行ありおよ変化あり今の人
くうぶまべ笑へ人もあまども狂言も
通じまでの賞素をえすべし
元祖行田出雲曰狂言作者の登ぐうきう
ものゆて役よ立間ぐたる年ぐいり乃
中ゆて作のよろうとうまるふ三年住

仏のでさるゆゑ三年又世を世してはくるゆゑ
三年より仏せんハ九年の余光ゆてやよ
いとハいきるとゆ老廻ものより虚中乃
実てこいくども実中の虚なれとそうもまり
のなハゆゑよ
栢廷曰老年ゆゑりて妻ゑ子ハ組織
よ老のすくなりのゆてゆりうぐと又後
者ゆて狂云と仏ゑ蕃の蔬ゆゑ
ゆり下根の者ハ仏者よ位せるゆゑ茶器と

医者ハとゝふるさゆよられとも仏者ハ老ゑゆ
ゆ役者も老きゆよ
角子狂云仏者中村仏七曰狂云と組織ゆハ絵ゆかく仏
ゆて仏るゆゑ文字のゆうよかゆ
女子仏よゆゑとして日りうる事あり見
拘流ハ一日の保者よ来るゆゑ肉の苦労を
ゆうとれさせるゆうゆ仏るゆよ
英子曰役者よ狂云ゆゑ色ゑる時後云ハ仏者
のゆゑ狭きゆゑ狂云ハとりて老ゑゆゑ

ゆあらぶることとより作者の役者の書ぶりをさるが
家業ゆて皆〻の気よ入るゆふ作りて為ぶするのち
狂を作者也古きかゆゆて為よあへだ作者いらぬ
事ゆり見まぐつるもこる狂ゆて大へをとし
と成こあり
元祖辰松八郎兵衛曰須磨の都源平躑躅の二段
目よ熊谷ゞ扇を へ扇を振へよ来りて敦盛乃
母こ気をさぶすす時煙草とのまんとして笛の音
の哀男女共へ奥の方へ目付たぐこを吸付け

なぐこ付家の内よ敦盛ゞ居ゆうと伝づきおち
ついてこづふ考へる振ゆて法ひやの又弟子
の妻ゞ郎ハらぶもゆて笛ゞ吹こく影ふく
方ぐをたづ移る振ゆて きひやの又大坂の文三ハ
表の方をえて笛の音よついて影ゞぶんく
奥乃方へむけてたぐこゞすひ付る振ゆく
つうひやの

二代目大谷十町ハ若き時文七とらひて人形
ぜうひより事ぐ八郎兵衛ゞ見きひとらと

るゆへ右の事紙をものぐりしたり

○二代目中村七三郎三度ゑの葉の雪の雷

をまる安壽郎王ゞ母の育人ゆてふしごと乃

面仮紙動めしたる元和辰松八郎兵衛人形の

振をみて唱るの言かゝろく唐へ

ゆうじとゝ文句のとゝ杖を殺してゝ

振ありこれい人形の名人八郎兵衛振よ

き事ゆある事ゞくゝ又乳遠のゝとゝゞゝく

ゝゞゝふ育人いとゝ岩像の沸蓋ゆて安壽

郎王の仮紙ゝひ是布どたづぬるゆ二人のみゞ

唐へよりやゆくゝ我身なゞらあきまて

我ゝ紙郎ゝふりとゞ其あの文句よ日の

事の地いよも云るゝゞとゝゆるゆ仮よるゝ

元祖竹田出雲ゞ仮ゝその後八郎兵衛ゞ弟の辰松

章助竹田蓋の人形をつゝ時葉の名乃限出月時

のゝ山の人形の図よ毎日うゝ紙をとりて生ひゝ

章助いよてゝ八郎兵衛人之

播磨掾曰芦屋道満の子別の限よ右と云ゞりゆ

妻やゝとだのてゐる病の臨終ゆとゝふをうい
うるタヽキよ節をはけておきうしふ初日すぎて
内匠寺まいゝ中う狐の性狸ちまてうぐるゝうれ
ふふとうゝるタヽキのふゝいでゐやと向されて
だその中ゝ愁場のふゝ紙はけるゆゝまるのあを
きるゐ中でいおりゝくかうておるゝべは見物
所がある見れなる文るよあるるりのゝ紙さはても
場あうねぞうアできうゝのゝとゝふふあられゆゝ
なうぐうゝふゝうゝびゝそれゆゝよゝそ面白あられふ

ふゝづけをゝうゝゝおくぐゝよゝゝ
越前掾曰きはるゆてゐ紙たけをゝちゝろろ
潤ゝのゐるりのゝそゝ紙二ゝうゝゐてゐ潤ゝゐ
ゐゝ甘ゝゝ二ゐゝゝるゝゝいぐきも二の紙ゆて潤ゝ
とゐゝ甘るぐゝゝゝ節の差き者ゝ紙さ甘て
ゝのゝ紙ゐゝゝてかるぐゝゝ老ゝのつけ
ゝるふゝゝのゝとゝくゝ古風ゝゐゝゝぐふりのゝ
二代目少長曰伎藝ゝ行事ゝゝぐゝ手をゝり
てゝ法やぐゐけるりのゝ念ゝ念紙ゝまるゐぐ

このあたりにやどりさくなるうり
納子四中通の役者八ようの役をして見物よ
ろこばらまんと称ぐよいたきよ人ばちぐひうり
むすまよこせつのてあちどとれを相人の邪广よ
なりてらやどらもるるの多くまづ豆おの乳ふ
べるをうまれべその豆あがあいてはとふ四人
志ぜんとよの役ぶ始てうそのうくゆてうん病
よあわらるるぶよ
又曰各人とよだるくよう役者が人てるなふ

さべうくべ我身より下の役者の中あてよをな
るものまを称をとるぶうくべ其者ようすうく
ようけをでまるとへうえんどとれ秘事を的を
称らふゆも四下の下と称らべあうへちぶと
さぬものなり

李園叢書歌舞妓雑談 終

後叙

「欲雨雨霏果従昏赤手天」と李子が佳句の趣意梅の盛りをうつして桜のうつさ残咄に妙き花を見ぶ人はうたゝ我生業は何ぞじさ下手の画道人丸板木師なんどゝ毎々毎年板本にしくどの述て作る本文をせる事なりしそやされのも戯場は例乃別世界やし哉ん狂言春狂言とあるの稽古するおはたてらまはむしの向きなる折から扉紙敲て訪来る双紙重の主人也嬉毎よう一小冊残

ところで速に挍せよと彼亭主後の出来して大分歎じ常に親しむ俳優にかゝる著述のあらむことを志ぬ娘を是非とも出てく抜ける狂の役者自身恥入て役者ながらも筆まかせに時々著述のあるまじくも作者のはしくれにて月日残迹によその安否をもたらすく探の下の力持て辻番の鳴物にて楽屋で声乃うきよしと居るあらぬ舟まの其役足の定役にもみなすずるの合羊の挍合はいそぎ復よりし結まと

戊寅三月上浣

花笠文京

中村芝翫著

歌舞妓雜談　二編嗣出

歌川國直画

市川白猿遺稿

小倉山併百首　全一冊近刻

七代目三舛自画

西洋の品々ふり付の秘密ホ
古人ふりふり付くるる名人
よりのいと長ふふ我々のまち
とるるるあまとあひ

小倉山の百首をとりじてて
のひとる狂歌ふる世ホらい
東洋百しるふふ

文化十五年戊寅三月發行

大坂心齋橋筋唐物町　河内屋太助

江戸通油町　鶴屋喜右衛門

同人形町通　鶴屋金助

江戸書林雙鶴堂藏版略目錄　人形町通　乗物町　地本錦絵問屋　鶴屋金助

梅花氷烈　三冊　山東京傳作　歌川豊国画

松浦佐用媛石魂錄　三曲亭馬琴作　歌川豊廣画

同後編　當年出板　同作

お編のつきてせいりれるもてこ
そのの後俳優瀧川の考ふれ支帰の
自列をあひ瀧川と号し瀧村氏と
称せ〳〵とあるこ

阿古義物語　五冊　式亭三馬作　歌川豊国画

後篇近日来
あるぶ浦ひくあるこひきまれば
りてよ毒をとりくるあれるこ

道中膝栗毛　続七編十七冊　十返舍一九作

三千世界樂屋探　三式亭三馬作　歌川豊国画

十二月のおもけ後編近く出板

忠臣藏偏癡氣論　一冊　同　歌川国直画

お編のあるとあるこ
海ふてとくこ

田舍芝居忠臣藏　四冊　同　作画

古人の冊ふ田舍のふ
のちの冊ふ
まちくのとこ

狂言田舍操　二冊　同　作画

あるのあくくあるとまのあ
とるがきとくきちんこ

四十八癖　初編二編三編　各三冊　同　歌川国直作画

當年四編出板

七名

六あまそぎ詰 合五冊 十返舎一九作 北川月麿画

江の島土産 合五冊 同 作

恵齋 精合 軽口噺 全一冊 同 作

同 福徳寿 一冊 同 作

同 孫次郎口 一冊 同 作

同 吹のつき色 一冊 同 作

略画早指南 初編三 前北齋 二編三 三編冊 葛飾戴斗画

踊獨稽古 初編 同 冊 同

人間萬事虚談 十一式亭三馬作

当寅年 後編多数 三画編 北川国直画

画本早引 初編 葛飾戴斗画

二編三編 法ぶのく 出板

○名品あきうひ物語ひろう

精製 艶布巾 深川隠士 霞月家製 料 三十六文

尾陽桐間堂製

○懐中合羽代 十五文 同 柄袋代 麦

○懐宝弁当袋代 四十八文

此書初代中村芝翫也後歌右衛門

又梅玉トカ云ヲ聞ト称ス

市谷山伏